

『アメリカとヨーロッパ 揺れる同盟の80年』

渡邊啓貴 著 中公新書 820 円 (本体)

見落としていた知識を補充し
既存の個別知識を整理

会員 内野 真一 (57 期)



私の読書は、実学系の新書が中心で、書店で眺めて、これはあまり知らないな、などと感じると、購入して読んでいた。読んで物事を理解吸収し、そこから何かを考えるということ自体、分野にかかわらず嫌いではなく、ほとんど勉強しなかった一般教養の補充の意味もあり、特定のジャンルに絞っているつもりはなかったが、自宅の本棚を眺めてみると、歴史ものが多い傾向ではあった。

個人的に感心した本は、大体万人受けするものではないと思われ（例えば、新城新蔵氏の「戦国秦漢の暦法」とか）、実は「お薦め」はしにくい。今回紹介する本は、直近読んだ本の中で、私が読む典型的なものにして、比較的紹介しやすいと思うものである。時折、独りよがりな曲筆にぶつかり、読んでいて腹立たしくなったり、竜頭蛇尾で呆れることもあるが、この本は、その種の心配はいらないと思われる。

この本は、第二次大戦後の現代史について知識が不足していた印象であったこともあり、読んでみた本である。概要は、主に第二次大戦後から直近までのアメリカとイギリス、フランス、ドイツなどヨーロッパ諸国の同盟関係を中心として描かれている。どちらかというとヨーロッパの視点から描かれている。

イギリス、フランスがヨーロッパの復興と平和のためアメリカを招き入れ、冷戦とともにアメリカの覇権的協力関係、それも、軍事・安全保障の次元だけで

はなく、政治・経済・文化・価値規範を含む包括的な同盟関係に発展していったこと、ヨーロッパがアメリカのコミットを強く望み、アメリカは通常戦力の不足を戦術核兵器に力点を置く形で補ったこと、デタント、中東危機、冷戦終結など時系列に沿いながら、競争、摩擦や離反、対立など同盟関係がときに動揺しながらも、決定的な決裂には至らず国際秩序が維持されてきたことなどが描かれている。

筆者は、その基礎に、キリスト教的な歴史・価値規範・思考行動様式を共有する共通文化圏であることにして、近代以後米欧諸国が世界秩序の形成と維持に対する責任感と自負を共有してきた2つの暗黙の共通認識があると指摘する。

コンパクトにまとめられており、その分、掘り下げる多くはないが、ヨーロッパ現代史を全体的に鳥瞰し、見落としていた知識の補充と既存の個別知識を整理する機能性は高いと思われる。

また、日本外交、特に日米関係を考える上で大いに参考になると考えられることが執筆の動機の1つだったそうである。ただ、筆者による比較論は、この本には論述されていない。そこは、読者に委ねているということだろう。確かに、読んでいて、ある程度シンメトリックな関係にありそうなことは感じられ、日米同盟を理解した方がいいのであればこのあたりもある程度は押さえておいた方がよさそうでもある。